

論文

atの意味は「点」ではなく「位置」である —前置詞atの意味論に関する一考察—^{注1}

藤原 隆史・加藤 鉦三・マーメット・ショーン・コリン

The Meaning of “At” is not “Point” but “Location”:
A Study on the Semantics of the Preposition “At”

FUJIWARA Takafumi, KATO Kozo and Sean Collin Mehmet

要 旨

atは「点」という語彙的意味を持ち、さまざまな用法がその「点」から派生している、と一般には考えられている。しかし、atの諸用法を観察すると、そのような派生的意味合いは、at自体が持つものではなく、atの目的語の意味分類であったり、共起する動詞の意味であったりすることが分かる。したがって、at自体にそのような派生的意味を認める必要はない。さらに本稿では、atには「点」という語彙的意味さえもなく、目的語にモノではなく位置を取る、という意味的制限があると考えの方が合理的であることを示した。

キーワード

前置詞at 前置詞の語彙的意味 「点」 モノではなく位置 のところ

目 次

I. 本稿の目的

II. 先行研究

III. atの意味論

IV. まとめ

謝辞

注

文献

I. 本稿の目的

atの中心的意味は「点」であるとされている。しかし、atのさまざまな用法を見ていくと、「点」というような語彙の意味はatにはないと考えた方が合理的であるように思われる。本稿では、atにはそのような「中心的意味」はなく、さらに、他の前置詞のように「中」とか「経由」などのような語彙の意味さえもなく、「atはモノではなく位置を目的語に取る」という目的語名詞の意味的制限しかないと考えるべきである、という主張を展開する。

本稿の構成は以下の通りである。次章で前置詞の意味記述についての先行研究を概観し、本稿の立場を明らかにする。続く3章では、前置詞atの「意味」について考察する。その際、本稿の考えるat自体の意味、atに後続する目的語名詞におけるモノと位置の関係について言及する。そして、最後の章を全体のまとめとする。

II. 先行研究

前置詞atの先行研究は、3つのタイプに大別することができると考えられる。すなわち、(i)辞書的定義と用法の列挙を行うもの、(ii)中心的スキーマとそこからの意味拡張による説明、(iii)各意味は中心的スキーマと文脈の情報によって多義的に見えているだけであるとするものである。本章では、それぞれの考え方を代表する先行研究を取り上げ、それらの問題点および利点を指摘するとともに、議論の出発点となる研究について言及する。

1. 辞書的定義と用法の列挙

規範文法の立場をとるにせよ、記述文法の立場をとるにせよ、最も基本的なアプローチの仕方は用法の意味の記述と用例の列挙であろう。前置詞について言えば、日本の学習用参考書や文法書の多くでこのアプローチがとられていると言われている¹⁾。前置詞atの辞書的定義はどのようになっているのだろうか。Oxford Advanced Learner's Dictionary (OALD) 第9版²⁾によれば、前置詞atには“used to say where sth/sb is or where sth happens”という用法を筆頭として15個の意味用法があるとされてい

る。また、Quirk et al.(2010)³⁾、Swan(2005)⁴⁾、安藤(2012)⁵⁾等もこのタイプのアプローチで前置詞の意味を記述している。例えば、安藤(2012)は、前置詞atに少なくとも6つの意味用法を認め、意味用法ごとに多くの用例を挙げている。

このアプローチでは、全ての用法をスペースの許す限り列挙できるという点において網羅的であるといえることができる。電子計算機が普及して久しいが、それらを用いて電子的に記述を行えば、無限と言ってもよい程の用例を記述することも可能となる。一方で、この方法の問題点として、網羅的で膨大であるが故に、特に英語学習者に多大な負担を強いることになる点が挙げられる。さらに、仮に全ての用例を記述したとしても、新しい用例が無限に生まれてくる上に、ただ用例を記述するということは、その前置詞の「意味」を何も説明できていないということになってしまう。

2. 中心的スキーマとそこからの意味拡張による説明

2つ目のアプローチとして、何らかの中心的スキーマ(中心義)を定め、各意味がそこから拡張して広がっているという説明をするものがある。代表的な例として、Lakoff(1987)⁶⁾のoverの研究が挙げられる。Lakoff(1987)はWittgenstein(1952)⁷⁾の「家族的類似性」という考え方を語彙意味論に敷衍し、ある語の意味は中心的なものから周辺的なものへと放射状カテゴリーを形成していると説明した。以下の図1はLakoff(1987)によるoverの放射状カテゴリーである。

中心的スキーマは、各用例を説明しうる抽象的な意味ということになるが、Lakoff(1987)では、overに6つ中心的スキーマがあり、それらから各意味用法が拡張し放射状カテゴリーが形成されていると説明されている。Lakoff(1987)以来、若干の修正を加えながらこのアプローチによる意味記述が行われてきた。例えばDewell(1994)⁹⁾は、Lakoff(1987)の説明は複雑であるとして、前置詞overの説明には単一的な中心的スキーマを設定し、各意味用法はこのスキーマのスキーマ変換¹²⁾によってもたらされるとした。前置詞atに関しては、Dirven(1993)¹⁰⁾が中心的スキーマとそこからの意味拡張による説明を行っている。以下の図2は、Dirven(1993)が示した

atの放射状カテゴリーの図である。

Dirven(1993)は、orientation-pointという中心的スキーマから各用法が拡張しているという説明をしている。すなわち、この中心的スキーマは、物理的一点(at the station)、もしくは時間的一点(at six o'clock)と繋がっており、さらにそこからメタ

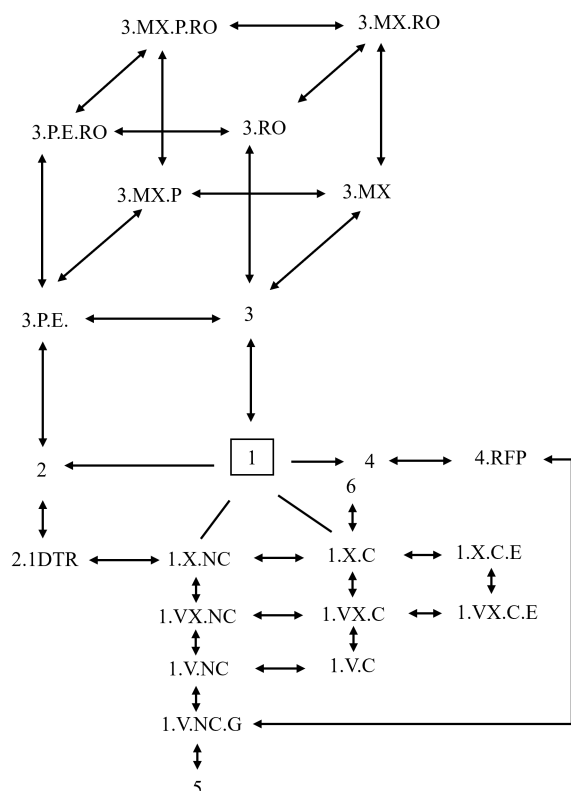


図1. Lakoff(1987)によるoverの放射状カテゴリー⁸⁾

ファーによって、状態(at work)、主題領域(good at guessing)、様態(at full speed)、状況(at these words)、原因(laugh at, irritation at)といった意味用法に拡張が起こっているということである。ここまで見てきたような中心的スキーマとそこからの意味拡張という説明は、一般向けの学習用参考書にも見られる(Moore, 2018¹²⁾、すずき・ミツイ, 2018¹³⁾等)。また、後ほど詳述する瀬戸 et al.(2007)¹⁴⁾もこのアプローチをとっている。

しかしながら、この方法も万能ではない。花崎・花崎(2019)¹⁵⁾は、このアプローチにおける3つの不備を指摘している。1つ目は、そもそも中心的スキーマをどうやって決めるのか、2つ目に、前置詞が用いられる文脈が考慮されていない、3つ目として、各意味の関連が説明されていない、というものである。特に2つ目の点は重要な指摘であり、次節で見る文脈情報を重視するアプローチと関係している。

3. 各意味は中心的スキーマと文脈の情報によって多義的に見えているだけであるとするもの

このアプローチとしては、Tyler & Evans(2003)¹⁶⁾を挙げることができる。彼女らは、中心的且つ唯一的スキーマを proto-scene(原形図)として設定し^{注3)}、ある前置詞の意味はその用例がどのような言語的手掛かり(共起する動詞など)を持ち、どのような文脈の中で用いられているか、また、こういった一般的

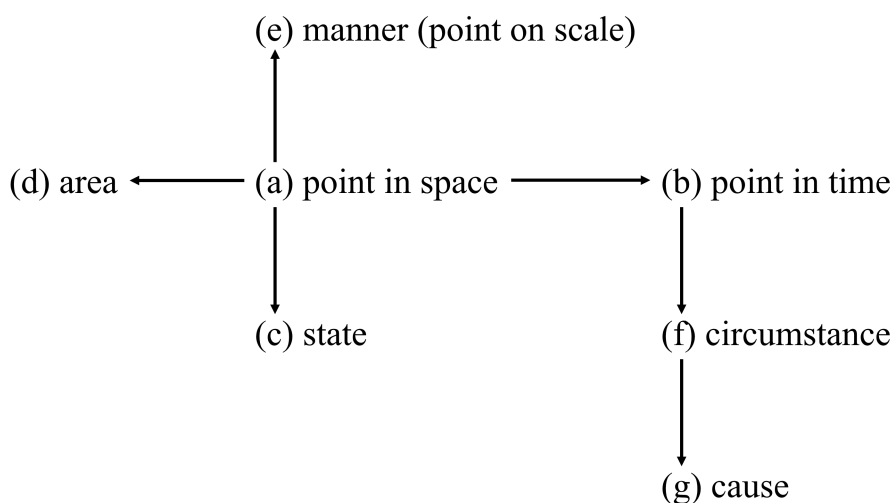


図2. Dirven(1993)によるatの放射状カテゴリー¹¹⁾

知識に基づくかということによって決まると主張している。一つ上で見たような中心的スキーマを設定し、そこからの意味拡張のみで全てを説明しようとするアプローチとは一線を画す説明であると言える。このアプローチは、本稿での私たちの考え方と親和性があると思われる。すなわち、前置詞の「意味」そのものが何であるかを考える際、与えられた言語の手掛かりや文脈情報、一般的知識といったものは、前置詞の「意味」には含まれないという立場を私たちはとるからである。この点で、Tyler & Evans(2003)の論考は、私たちの議論を論理的に裏付けるものとして有効であると考えることができる。しかしながら、Tyler & Evans(2003)では、前置詞atについての具体的な言及がない。そこで、次節および次章において、中心的スキーマを設定し、そこから各用法を説明しようとするアプローチの代表である『英語多義ネットワーク辞典』のatの記述を取り上げ、atの「意味」だと思っていたものが、実はatそれ自体の意味ではないということを見ていくことにする。

4. atの『英語多義ネットワーク辞典』での記述

atについて私たちがどう考えるかを説明する前に、『英語多義ネットワーク辞典』¹⁷⁾でのatの記述を先に見ておくことにしたい。そこでは、atは次の意味ネットワークを形成しているとされている。その見方は英和辞典で一般的に見られるものと同じであり、「常識」的なものであると言えよう。

①<場所>の一点で

- ④[特性類似] 組織の場に属して
- ⑥[特性類似] 目標の一点を狙って
- ①[特性類似] 時間軸上の一点で
- ②[特性類似] 数値の一点で
- ③[特性類似] 活動に取り組んで

ネットワーク

「場所の一点で」が中心義。認識対象を空間的な広がりを持たない「点」と捉える。この認識がすべての意義に共通する。空間的な意義には、「所属」と「目標」を表す意義がある。空間から時間に意義展開すると、「(時間軸上)の一点で」を意味する。より抽象的には、「(数値)の一点で」を表し、さらに、「(活

動など)に取り組んで」を意味する。全体的に、空間・時間的な連続の「一点」にスポットを当てるという意味合いが優勢である。

(『英語多義ネットワーク辞典』¹⁸⁾：一部改)

それぞれの用法であげられている例を、いくつかここで見ていくことにする。

①<場所>の一点で

They parted at the corner.^{注4}

Alan lives at 2608 Monument Avenue in Richmond.

Write your name at the top[bottom]of the page.

「場所の一点で」は、atの目的語が場所の一点である場合であり、解説は要しない。

④[特性類似]組織の場に属して

a student at the university

a member at the club

He was at school with me.

『英語多義ネットワーク辞典』では、この用法について、「社員・学生などとして人がある組織に『属して』いれば、ふつうその組織のある場所にいる。『一点において』組織と接する」と説明している¹⁹⁾。atの中心的意味を「点」とする限り、この用法についてはそのようなことを言わざるを得ないだろう。ここでは、「『一点において』組織と接する」という主張は意味が分からないものとなってしまっていることだけを指摘しておきたい。

⑥[特性類似]目標の一点を狙って

Have a look at this.

She laughed [smiled, winked] at him.

A child threw a stone at the horse.

Paul grabbed at Derry's shirt sleeve.

He pulled her closer and aimed a kiss at her mouth.

A woman shouted at me, "How dare you come in here!"

この用法は、atの目的語が「点」であることは間違いない。よく知られているように、この用法のこのatについては、toとの対比が非常に興味深い^{注5}。

①[特性類似]時間軸上の一点で

at noon [midnight, lunchtime, present]

She gets up at 4:30 a.m.

Education begins at the time of birth.

「時間軸上の一点で」は、場所の場合と同じく名前の通りであり、解説は要しない。

②[特性類似]数値の一点で

at a good price

The airplane is at 10,000 feet.

They drive at 60 mph in narrow country lanes.

この用法でも、用法名とatの目的語の分類が一致している。

③[特性類似]活動に取り組んで

a hard day at work

watch children at play

My mother is good at cooking [remembering things].

Maggie is at her desk.

She would sit at the piano and sing.

12 people were at their computers.

When they sat down at table she couldn't manage to eat anything.

Others did not disturb him when he was at his books.

『英語多義ネットワーク辞典』では、この用法について、「『活動中の』の意義がatに備わるので、There was a man at the door.の表現からも、なんらかの『用事』があることが推測される。」と解説している²⁰⁾。つまり、atに「活動中である」という固有の語彙の意味が備わっていると主張していることになる。

Ⅲ. atの意味論

1. at自体の意味は何であるか

前節で、「場所の一点」と「時間軸上の一点」の用法を見た。そこで特徴的であるのは、「場所の一点」

の用例ではatの目的語がまさしく場所の一点を表す表現であり、「時間軸上の一点」の用例ではatの目的語がまさしく時間軸上の一点を表す表現であることである。そのことを念頭に置いて「活動中の」の用例をもう一度見てみると、それらには、atの目的語が活動を表す表現であるか、活動を想起させる表現であることが分かる。ここから私たちの次の指針が導かれる。

(1) 本稿の指針

前置詞の用法とされているものから、前置詞の目的語や動詞等、前置詞以外の要素を持つ意味要素を全て捨象し、それでも残っている意味要素が、前置詞自体の意味であり得る。

この指針の下に、上記の用法を再検討してみよう。

(2) ①〈場所〉の一点で

例：They parted at the corner.

atの目的語は場所の一点を指す

→at自体が「場所」と「一点」という意味を持つと考える必要はない

(3) ②[特性類似]組織の場に属して

例：a student at the university

atの目的語は組織であるため、組織については所属の有無が想起される

→at自体が「組織」と「属して」という意味要素を持つと考える必要はない

(4) ③[特性類似]目標の一点を狙って

例：A child threw a stone at the horse.

動詞が「を狙って」を担当し、atの目的語はその狙われる一点の対象であり「を狙って」という意味要素にはatは関与していない

→at自体が「の一点を狙って」という意味要素を持つと考える必要はない

(5) ④[特性類似]時間軸上の一点で

例：She gets up at 4:30 a.m.

atの目的語は時間軸上の一点である

→at自体が「時間軸上の一点」という意味を持つと考える必要はない

(6) ⑤[特性類似]数値の一点で

例：The airplane is at 10,000 feet.

atの目的語は一点の数値である

→ at自体が「数値の一点」という意味要素を持つと考える必要はない

(7)③[特性類似]活動に取り組んで

例: Maggie is at her desk.

atの目的語は活動か活動を想起させる表現であるため、活動については従事の有無が想起される

→ at自体が「活動に取り組んで」という意味要素を持つと考える必要はない

(4)については解説が必要である。(8)の対比を試みよう。

(8)a. A child threw a stone at the horse.

b. A child was at the horse.

もしat自体に「目標の一点を狙って」という意味があるとしたら、(8a)だけでなく(8b)にもそのような意味がなければならない。そうだとしたら、(8b)の解釈は「少年がその馬を狙っている」というものでなければならないはずである。しかし実際には(8b)にはそのような意味はなく、(8b)の解釈は「少年はその馬のところにいた」というものしかない。さて、(8a)と(8b)の違いは動詞の違いである。throwの表す動作には「狙う」という意味要素が含まれている。上の例を再掲して個々に確かめてみよう。

⑥[特性類似]目標の一点を狙って

Have a look at this.

視線を走らせる ← 「狙う」が含まれている

She laughed [smiled, winked] at him.

～に対して笑いを向ける ← 「狙う」が含まれている

A child threw a stone at the horse.

投げる ← 「狙う」が含まれている

Paul grabbed at Derry's shirt sleeve.

つかもうとして手を伸ばす ← 「狙う」が含まれている

He pulled her closer and aimed a kiss at her mouth.

「狙う」

A woman shouted at me, "How dare you come

in here!"

～に対して叫ぶ ← 「狙う」が含まれている

このように、「狙って」という解釈がある場合には、文で描かれている動作に「狙う」という意味要素が必ずある。一方、「狙って」という解釈がない(8b)では、文で描かれている動作に「狙う」という意味要素はない。atに「目標の一点を狙って」という意味があるとする立場では、文の動作に「狙う」という意味要素がある時だけこの用法が成立する、という重要な事実を完全に見逃してしまっていることになる。ここから、at自体に「を狙って」という意味があると考えことはできない、と強く主張できる。

2. 本稿の考えるatの意味

上記(2)～(7)を見ると、at自体には語彙の意味は全くない、というように見えるかもしれない。しかも、その考えには大きな利点がある。もしatが何らかの語彙の意味、例えば(2)～(7)のうちの(2)を持っていると考えると、今度は残りの(3)～(7)の全てが説明できなくなってしまう。ごく単純に、「場所の一点」が(3)～(7)には当てはまらないからである。ここで、例えば(5)の「時間軸上の一点」は(2)の「場所の一点」のメタファーである、と主張したとしよう。それは実際には事態をほぼ全く改善しない。なぜなら、そのメタファー的拡張による解決の方策は、(3)(4)(7)には通用しないからである。しかし、もし「atには語彙の意味はない」と主張したとしよう。その場合は、そもそも語彙の意味がないと言っているのだから、今見たような「他の用法ではそれは当てはまらない」という問題は全く回避できることになる。

しかし実際にはそれも得策ではない。次の対比を試みよう。

(9)a. The fly is in the door.

b. The fly is on the door.

c. The fly is at the door.

(9a)では、ハエはドアという建具の内部にいる。(9b)では、ハエはドアという建具の表面にいる。このように、前置詞の目的語は、通常、モノとして扱われる。ここではドアは建具というモノである。同様に、(10a)

では、inの目的語は物理的な範囲としての東京として用いられている。

- (10)a. He arrived in Tokyo.
b. He arrived at Tokyo.

このように、前置詞は一般的に目的語をモノとして取っている。一般的に、前置詞は、何かの位置関係を前置詞の目的語を使って表示する。

(11) X[P Y]

Pがinの場合、Xは「Yの中」という位置関係にあり、Pがonの場合、Xは「Yの表面」^{注6}という位置関係にあることを示す。ここでは、位置関係を言うための基準となるYはモノとして扱われている。

それでは、atの場合はどうだろうか。(9c)では、ハエはドアの中とか表面とか後ろとかいう意味で言えば、「ドアのどこかにいる」という意味は持たない。同様に、(10b)も東京の中とか近くとかいうことは言っていない。

(9c)は、日本語にすれば「ドアのところにいる」というくらいの訳文になる。この「～のところ」はどこから来た意味要素なのであろうか。もちろんthe doorには「～のところ」という意味要素はない。だとしたら、「～のところ」という意味要素はatが持つものであると言わざるを得ない。そこで、次のような仮説を立ててみよう。

(12) 本稿の仮説

- a. 前置詞は[モノ]を目的語として取り、X[P Y]において、各前置詞の固有の語彙的意味は、モノYを基準にしてXについて述べるというものである。(inは「Yの中」、byは「Yを経由して」等)
b. atだけは目的語として[モノ]ではなく[位置]を取る。

なお、(12)の「モノ」とは、抽象物に対する具体物という意味ではなく、「位置以外」という意味で言っている。(12)が何を言っているかを見るために、もう一度(9)と(10)の意味内容を検討しよう。

- (9) a. The fly is in the door.
b. The fly is on the door.
c. The fly is at the door.
(10)a. He arrived in Tokyo.
b. He arrived at Tokyo.

(9a, b)ではドアは物体として扱われている。しかし(9c)では、ドアという物体としてではなく、位置表現として扱われている。もちろん、ドア自体は位置ではあり得ない。そのため、日本語訳では「ドアのところ」という表現になる。これは非常に興味深い現象である。それは、(10b)では「東京のところ」という訳にはならないからである。(10a)では、東京は東京というモノとして扱われており、彼が東京の範囲内に到着したということを言っている。(12a)に従えば、(10a)は「モノとしての東京に着いた」ということになる。一方、(12b)に従えば、(10b)は「位置としての東京に着いた」ということになる。(10b)は、単に「東京に着いた」という訳文で十分成立する。

「ドア」と「東京」の違いは何だろうか。モノ自体はもちろん位置ではあり得ない。だから(12b)に従ってモノを位置扱いするためには、「のところ」という表現で補わなければならない。それに対し、「東京」は地名である。地名とは、モノの名前というよりは位置の名前であると考えてみよう。そうであるならば、地名はもともと位置であるため、「のところ」が必要ない、という説明が可能になる。

今見た「のところ」による位置化という現象は、atの持つ語彙的意味だけでなく、英語と日本語のものの見方の違いを教えてくれる、非常に興味深い現象である。冒頭の『英語多義ネットワーク辞典』のあげるatの諸用法の考察に戻る前に、次節でこの位置化現象を中心に、「モノ」と「位置」についてもう少し見てみることにしたい。

3. モノと位置

次の名詞を日本語と英語において検討しよう。なお、述語は英語にした時にatを使いやすいものになっている。

(13) 建物・ランドマーク

- a. 学校で会おう Let's meet at school.

- b. *学校のところで会おう
- c. 駅で会おう Let's meet at the station.
- d. *駅のところで会おう
- e. 公園で会おう Let's meet at/in the park.
- f. *公園のところで会おう

(14)地名

- a. 東京に着く He arrived at Tokyo.
- b. *東京のところに着く

(15)建物の一部

- a. 玄関で会おう
Let's meet at the entrance/in the entrance hall.
- b. *玄関のところで会おう
- c. 会議室で会おう
Let's meet in the conference room.
- d. *会議室のところで会おう

日本語では、建物・ランドマークと地名では、「の
ところ」による位置化を許容しない。それは、日本
語では、それらがモノとしてではなく位置として解
釈しやすいからであろう。一方、英語では、建物・
ランドマークや地名では位置として解釈されるが、
その場合でも、公園のように範囲として考えやすい
ものでは、位置ではなくモノ扱いして、その結果in
が用いられる。建物の一部は日英語で顕著な違いが
見られる。日本語では「のところ」による位置化を
許容しないため、建物の一部は日本語では位置とし
て解釈される。一方、英語では、一般的に、入れ物
等の空間として見ることができるものに対しては、
例えば道具の前置詞よりも場所の前置詞が優先され
ることが中右(2018)²¹⁾によって観察されている。

- (16)a. I go over my room with the vacuum cleaner.
- b. I wash my clothes in the washing machine.
- c. I weigh myself on the bathroom scales.
(中右, 2018, p. vi)

掃除機を使っている者からすれば、掃除機を、掃
除をする空間として認識することはない。しかし
洗濯機は衣服を洗濯する場所であり、体重計は体
重を測る場所として認識される。英語ではこのよ

うに、空間を表す前置詞 in, on が道具を表す前置
詞 withに優先して用いられる。その空間優先の法
則が建物の一部では顕著に見られる。同じ玄関で
も、entranceでは位置扱いでatが用いられるが、
entrance hallとすると空間として捉えやすくなるた
め、空間の前置詞inが用いられる。会議室はroom
であるためatではなくinが用いられる。以上を、
本稿(12)の仮説を踏まえて言い換えると、英語では、
目的語を位置として捉えることができる時にatが
選択される、という言い方でまとめることになる。
なお、(13)から(15)で問題にしている名詞がモノ扱
いではなく位置扱いになるのは、位置を要求する述
語に求められる場合に限られる。例えば「を壊す」
という述語は位置ではなくモノを要求するため、(13)
から(15)の名詞でも、位置扱いではなくモノ扱いに
なる。

(17)人物

- a. *太郎で会おう
- b. 太郎のところで会おう
Let's meet at Taro's.

人物の場合は、日英語ともに位置として扱うこと
はできず、それぞれのしかたで位置化が必要である。

(18)活動を想起させないモノ

- a. *岩で会おう *Let's meet at the rock.
- b. 岩のところで会おう

活動を想起させないモノの場合は、日本語では「の
ところ」による位置化が可能であるが、英語では位
置化の手段がないため、目的語に位置を要求するat
は使えず、onやin front ofのようなモノを要求する
前置詞を使うことになる。

(19)典型的活動を想起させるモノ

- a. その店で買った
I bought it at the shop.
- b. *その店のところで買った
- c. そのレストランで食べた
I ate at the restaurant.
- d. *そのレストランのところで食べた
- e. *デスクに(ついて)いる

I am (sitting) at my desk.

f. *デスクのところにしている

店でするのは売買であり、レストランでするのは食事である。このように、動作がその名詞での典型的な活動であり、名詞がその活動を意図して置かれている施設である場合には、そのような施設は、典型的な行為が行われる位置として捉えられ、英語ではatを使う。

しかし、デスクのように、名詞が施設ではない場合には事情は複雑になる。デスクでする典型的な行為はデスクワークや受付作業である。それにもかかわらず、Corpus of Contemporary American Englishで"working at his desk"でヒットするのは14件であるのに対し、"is at his desk"ではヒット数37件、"sitting at his desk"では148件であり、ここから、atとdeskの組み合わせでは、デスクでの典型的な活動自体ではなく、主語がどこにいるかを言う時に使われるということが示唆されているように思われる。主語がどこにいるかを言うために使われる、ということは、そこではデスクはモノではなく位置として扱われている、ということになる。なお、もしデスクが位置ではなくモノとして扱われているとすれば、デスクそのものは座る対象ではないため、sit at the deskはおかしな表現であるということになってしまう。このことから、この用法ではデスクはモノではなく所在、つまり位置を表す表現として用いられていることに留意されたい。

一方、日本語では、「(ついて)いる」という述部とともに所在としてデスクを使うことは難しく、「のところ」による位置化も許容しないようである。しかし、例えば「私のデスクまですぐ来てください」はそれほど悪くないので、施設ではない具体物を位置として見立てるしかたについては、英語では所在を言う時に位置として扱えるが、日本語では所在を言う時には難しい、という違いがあるようである。

4. 「位置」としてのatの諸用法

他の前置詞と違って、atはモノではなく位置を目的語として取る、という本稿のatの考え方を2節で紹介し、3節でモノを位置として見るということはどういうことであるのかを考察した。以上を踏まえ

て、冒頭で見た『英語多義ネットワーク辞典』があげているatの用法について、本稿の見方ではどういう扱いになるのかを見ていこう。なお、何かの位置を言う時、その何か自体は大きさ、広がりをもちろん持っているが、それはそのもの自体の大きさ、広がりであって、抽象的概念である位置そのものの大きさ、広がりではない。その意味で、位置は常に点である。そのため、本稿のように「atは目的語としてモノではなく位置を取る」と言う場合、位置は必ず大きさ、広がりを持たない点であるため、atの意味として点に言及する必要はないことに注意されたい。

(20)①〈場所〉の一点で

例：They parted at the corner.

atの目的語は位置である

→行為が行われた位置を言っている

(21)②[特性類似]組織の場に属して

例：a student at the university

atの目的語は位置であり、主語は人であって、人の位置は所属する組織であり得る

→人の位置として所属する組織を言っている

(22)③[特性類似]目標の一点を狙って

例：A child threw a stone at the horse.

動詞が「を狙って」を担当し、atの目的語は位置である

→atの目的語は狙われる位置である

(23)④[特性類似]時間軸上の一点で

例：She gets up at 4:30 a.m.

atの目的語は位置である

→atの目的語は時間軸上の位置である

(24)⑤[特性類似]数値の一点で

例：The airplane is at 10,000 feet.

atの目的語は位置であり、数値はスケール上の位置である

→atの目的語はスケール上の位置である

(25)⑥[特性類似]活動に取り組んで

例：Maggie is at her desk.

atの目的語は位置であり、目的語は動詞の表す活動が行われる典型的な位置であるか、目的語が持つ典型的な活動によって動詞が所在を表す場合は、目的語がその所在を表す位置である

→atの目的語は活動から見た典型的な位置である

IV. まとめ

本稿では、前置詞atの意味論について考察した。これまでの先行研究では、辞書的に用法や用例を列挙しているもの、中心的スキーマから全ての用法を説明しようとするもの、多義の根拠をat以外に求めるもの等があった。一般的には、atは「点」という中心義とそれ以外の複数の語彙的意味を持つと考えられているが、本稿では、atが多義的に複数の意味を持つというよりも、従来atが持っていると言われてきた意味要素を全てそぎ落としてもなお残っているのがatの意味である、という考え方で考察を行った。結論として、atには語彙的意味はなく、目的語にモノではなく位置を取る、という意味的制限があると考えの方が合理的である、ということを明らかにした。

謝辞

本研究は、JSPS科研費JP22K00746およびJP20K00841の助成を受けたものである。この場をお借りして感謝申し上げます。

注

- 注1 本稿は、加藤のアイデアを元に、藤原と Mehmetが執筆したものである。
- 注2 正確にはイメージスキーマ変換であり、中心的スキーマのどの部分が焦点化されるかによって各用法が説明される。
- 注3 Tyler & Evans(2003)は、中心的スキーマは以下の言語的証拠を確認することで設定されるとしている。すなわち、1. 文献的証拠のある最も古い意味、2. 意味ネットワークにおける優勢的な意味、3. 複合語の中で使用される意味、4. 他の空間前置詞との対比に用いられる意味、5. 文法的予測をする際の基準となり得る意味であるかどうか、である。詳細はTyler & Evans(2003)のpp.45-50を参照のこと。
- 注4 以後、引用部分の下線部は筆者による。
- 注5 toについては稿を改めて議論することとする。
- 注6 一般的にonは「表面接触」という語彙的意味を持つと考えるのが標準的であり、ここでは便宜上それを採用しておくが、私たちはonが「表面接触」という語彙的意味を持つとは考えていない。これについては稿を改めて論じることにはしたい。

文献

- 1) 花崎一夫・花崎美紀, 「英語前置詞 down と under の意味論―効果的な教育方法の試案―」『信州大学総合人間科学研究』13, p.3(2019).
- 2) Oxford Advanced Learner's Dictionary 9th Edition, Oxford University Press, p.81(2015).
- 3) Quirk R, Greenbaum S, Leech G, Svartvik J, *A comprehensive grammar of the English language*, Pearson Education India(2010).
- 4) Swan M. *Fully Revised Practical English Usage Third Edition*, Oxford University Press(2005).
- 5) 安藤貞雄, 『英語の前置詞』開拓社(2012).
- 6) Lakoff G, *Women, fire, and dangerous things (Vol. 10)*, University of Chicago Press(1987).
- 7) Wittgenstein L, *Philosophical Investigations (translated by G.E.M. Anscombe)*, Basil Blackwell/Macmillan(1953).
- 8) Lakoff G, *Women, fire, and dangerous things (Vol.10)*, University of Chicago Press, p.436(1987).
- 9) Dewell R B, "Over again: Image-schema transformations in semantic analysis", *Cognitive Linguistics*, 5(4), pp.351-380(1994).
- 10) Dirven R, "Dividing up physical and mental space into conceptual categories by means of English prepositions", *The Semantics of Prepositions From Mental Processing to Natural Language Processing*, pp. 73-98(1993).
- 11) 同上, p.77.
- 12) Moore D. *The Logic of English Prepositions: Intuitively Understand and Feel English like a*

- Native Speaker*, J. Daniel Moore (2018).
- 13) すずきひろし・ミツイ直子, 『イメージで比べてわかる前置詞使い分けBOOK』ベレ出版(2018).
 - 14) 瀬戸賢一・武田勝昭・山口治彦・小森道彦・宮畑一範・辻本智子(編), 『英語多義ネットワーク辞典』小学館(2007).
 - 15) 花崎一夫・花崎美紀, 「英語前置詞 down と under の意味論—効果的な教育方法の試案—」『信州大学総合人間科学研究』13, p.5(2019).
 - 16) Tyler A, Evans V, *The Semantics of English Prepositions: Spatial Scenes, Embodied Meaning and Cognition*, Cambridge University Press(2003).
 - 17) 瀬戸賢一・武田勝昭・山口治彦・小森道彦・宮畑一範・辻本智子(編), 『英語多義ネットワーク辞典』小学館(2007).
 - 18) 同上, p.61.
 - 19) 同上, p.61.
 - 20) 同上, p.62.
 - 21) 中右実, 『英文法の心理』開拓社(2018).